

1. はじめに

明治期の終わり、東京高等師範学校（以下、東京高師）を中心に行われていたサッカーは、その卒業生の地方への赴任や対外試合の実施により、日本各地へと広がる¹。大正期に入ると相当数の学校がサッカーを行うようになっていたが、そのレベルは低調だった。1917（大正6）年、東京芝浦で行われた第3回極東選手権に、東京高師が日本代表として初の国際大会出場をはたす。結果は、中国に0-8、フィリピンに2-15で大敗した。しかし、この大会を契機にサッカーの普及が進む。1918（大正7）年、朝日新聞社が経費を負担した関東蹴球大会が開催された。トーナメントには豊島師範A・B、青山師範A・B、埼玉師範、明治学院、佐倉中学、横浜二中が参加し、豊島師範Aが優勝。模範試合には、大使館員を主とするイギリス人の東京クラブ、中華留学生、朝鮮青年団、東京帝大のクラブ、東京高師A・B、東京蹴球団の7チームで4試合行った。関西では、大阪毎日新聞社主催による日本フットボール大会が豊中グラウンドで開催された。御影師範、関西学院高等部、明星商業、神戸一中、堺中学、姫路師範、奈良師範、京都師範が参加し、御影師範が優勝した。東海では、新愛知新聞社の主催による東海蹴球大会が名古屋市鶴舞公園で開催された。第八高等学校、明倫中学、愛知第一師範、愛知三中が参加し、リーグ形式で行われ、八高が優勝した²。このように、極東選手権への参加以降、東京、名古屋、大阪と都市部を中心に学生年代の試合が開催された。

1919（大正8）年、イングランドのフットボール協会から、シルバーカップが日本の蹴球協会宛に送られた。しかし、当時の日本には蹴球協会が存在しない。協会創設を条件に、大日本体育協会会長で東京高師校長の嘉納治五郎と東京高師蹴球部部長の内野台嶺がイギリス大使館でシルバーカップを受け取った。そして、1921（大正10）年9月10日、大日本蹴球協会が設立された。同年、関東、関西、中国・九州地区で地方予選が行われ、東京の日比谷公園の運動場で初めての全日本選手権、「全国優勝競技会（後の天皇杯全日本サッカー選手権大会）」の決勝大会が開催された³。協会創立当時、協会への加盟は関東及び東北で22チーム、中部で4チーム、近畿で23チーム、西部に3チームの計52チーム⁴でその多くが中学や師範学校などの学校チームだった。また、東京高師、東京帝国大学、早稲田大学、慶應義塾大学による日本で初のリーグ戦形式の大会、「大学専門学校4校リーグ（関東大学サッカーリーグの前身）」が行われ、旧制高等学校蹴球大会や全国高等専門学校蹴球大会の開催、関西でも、関西専門学校ア式蹴球連盟の結

¹ 東京教育大学サッカー部編『東京教育大学サッカー部史』恒文社、1974年、22-24頁。

² 日本蹴球協会編『日本サッカーのあゆみ』講談社、1974年、44-45頁。

³ 後藤健生『日本サッカー史-日本代表の90年-』、双葉社、2007年、34-35頁。

⁴ 大日本体育協会編『大日本体育協会史 下巻』大日本体育協会、1936年、1017-1018頁。

成とリーグ戦の開始など、サッカーの大会が次々と誕生した。さらに、北海道、東北、名古屋、金沢、広島、松山、九州地域でも学生蹴球大会が開催されるようになる⁵。

日本にサッカーが導入された時期、選手の技術水準の低さからか、キック・アンド・ラッシュ戦法が用いられていた。これはフルバック（現在のディフェンダー）の選手がボールを大きく蹴り出し、フォワードがゴールを狙う戦い方で、厳密にはパスの概念がなく、フルバックとハーフバック（現在でいうと守備的ミッドフィールダー）で構成されるバックとフォワードは攻守の分業が成立していた。また、ゴールキーパー、2人のフルバック、3人のハーフバック、5人のフォワードで構成される1-2-3-5のピラミッド型のポジションの配置でゲームが行われた⁶。1920年代になり、国際大会への参加、各地や各年代で様々な大会が開催されたことにより、新たな技術・戦術が誕生し、定着する。技術の向上とともに、キック・アンド・ラッシュから、ロング・パス主体の戦い方になり、ショート・パスを主体とする新たな戦い方が登場する。

ショート・パスを用いた戦い方の誕生に大きな影響を与えたのが、ビルマからの留学生チョー・ディン（KYAW DIN: 1900-没年不明）である。チョー・ディンは、コーチとして指導した早稲田高等学院を旧制高等学校蹴球大会で2連覇に導いた。また、全国巡回コーチとして神戸一中、御影師範、埼玉師範、山口高校などで指導し、日本におけるサッカーの技術・戦術を発展させた。さらに、彼は日本サッカーに欠けている点を補うための著作として、『How to Play Association Football』を出版する。

本稿では、日本サッカーの技術・戦術史の整理のための一資料として、ショート・パス戦法が行われるきっかけとなったチョー・ディンの指導した技術・戦術について明らかにする。そのためにまず、キック・アンド・ラッシュ戦法からショート・パス戦法までの日本サッカー草創期の戦術の変遷を概観する。そして、『How to Play Association Football』の内容とチョー・ディンに指導を受けた人物による評価から、その技術と戦術について検討する。

2. 日本サッカー草創期の技術・戦術の変遷

前述したように、日本サッカー草創期の戦術は、キック・アンド・ラッシュ戦法からロング・パス戦法、そして、ショート・パスを用いた戦い方が登場した。キック・アンド・ラッシュ戦法に続く、ロング・パスを用いたサッカーは、キックの技術が向上したために登場した戦い方である。この戦い方の利点としては、密集したエリアをドリブルで進むよりも、相手守備の薄いところに選手を配置し、そこにボールを送ることで攻撃をシンプルにする。確実に攻めるといよりは、相手にボールを奪われる可能性があっても、速い攻撃を目的としている。両側のタッチライン近くにウイング・フォワード（以下、ウイング）を配置して、そこにロング・パスを供給し、ドリブル突破からセンターリングを狙う。この狙いをベースに、センター・フォワードやインナー・フォワード（以

⁵五島祐治郎『大学サッカーの断想-関東・関西の大学サッカー文化を中心に-』晃洋書房、2009年、90-91頁。

⁶榎本雅之「サッカー専門書にみる日本サッカー草創期の技術と戦術—東京高等師範学校蹴球部によって出版されたサッカー専門書の検討—」滋賀大学経済学部 Working Paper294号、2020年、1-12頁。

下、インナー) のドリブル突破、ショート・パスによる突破などもある。基本的に相手ディフェンスの薄い場所に有効なパスを送り、局面の打開をはかるのにロング・パスが多く用いられたので、ロング・パス戦法と呼ばれた⁷。

1921 (大正 10) 年春、上海で行われた第 5 回極東選手権大会の報告書から、代表チームの戦い方を確認することができる。このときの日本代表チームは全関東チームで、東京高師から 6 名、東京蹴球団から 7 名、東大から 1 名というメンバー構成だった。結果は、フィリピンに 1-3、中国に 1-4 の敗戦だった。主将である高橋実 (後、佐藤実) は、初めて芝生のグラウンドで戦うので面食らったこと、敵はパス (ショート・パス) が上手くて苦しんだこと、日本は選抜チームのため連携に課題があったこと、相手はヘディングがうまかったことなどを述べている⁸。また、後に佐藤は、この大会での日本の戦い方について、フルバックやハーフバックの選手は必ずウイングにパスをすること、ウイングの選手はタッチライン沿いにドリブルを仕掛け、ゴールライン近くまで行った後、中央にボールを送ること、中央の 3 人のフォワードの誰かが身体のだこかでボールを止めて、そのままゴールに向かってドリブルすること、シュートをしなかったこと、中央の 3 人がパスを用いての中央突破がなかったことなどを振り返っている⁹。このことから、代表チームにおいて、選抜チームとして連携に課題があることを自覚しつつも、やみくもに前線にボールを蹴り出し、フォワードが押し寄せるキック・アンド・ラッシュの戦い方ではなく、ウイングにボールを供給し、個人でサイドを打開、センタリングするロング・パスを主体とする戦い方になっていることがわかる。

新しい戦術の登場のきっかけは、1923 (大正 12) 年から始まった旧制高等学校蹴球大会で、それまで無名だった早稲田高等学院が優勝したことだった。早稲田には、コーチとして東京高等工業学校にビルマから留学していたチャー・ディンがいた¹⁰。この年、8 月、彼はサッカーの専門書『How to Play Association Football』を出版する。早稲田の優勝により、チャー・ディンの名声が高まっており、全国各地から指導を受けたいという要請があった。9 月に関東大震災があり、東京高等工業学校の校舎が全壊、授業再開の見通しがつかなくなった。授業が行われない期間、チャー・ディンは各学校への巡回コーチを行う¹¹。

チャー・ディンは、巡回コーチでインステップキック、インサイドキックなどの基礎技術や基礎的な戦術を教えた。この指導を受けた神戸一中は、ショート・パス戦法により 1924 (大正 13) 年度の第 8 回日本フットボール大会で優勝する。この大会での神戸一中は、学校制度の関係で、2 学年上の学校と対戦しなければならなかった。体格差を乗り越えるためには、ショート・パスしかない信じ、徹底的にこれをマスターすることに務めた。神戸一中の優勝以降、ショート・パスでの戦い方を採用するチームが登場し、

⁷ 竹腰重丸『サッカー』旺文社、1956 年、30-31 頁。

⁸ 多和健雄「サッカーの技術史」、岸野雄三編『スポーツの技術史』大修館、1972 年、489 頁。

⁹ 同上書、489-490 頁。

¹⁰ チャー・ディンは、早稲田大学のグラウンドで走り高跳びのトレーニングをしているとき、偶然早稲田高等学院サッカー部の練習を見かけて指導を始めたといわれている (後藤健生、前掲書、39 頁。)

¹¹ 多和、前掲書、491 頁。

このチームはショート・パス戦法、このチームはロング・パス戦法と一つの戦術を唯一の武器として採用していた。しかし、1930年代には、この両戦術をゲーム展開の中で選択した攻防がみられるようになる。こういった現象は、日本サッカーにおける全体的な技術の向上であるといえる¹²。

ショート・パス戦法のチーム戦術は、攻撃局面では、ロング・パス戦法で用いられた深いW字型のフォワードの配置から、浅いW字型の配置に変わり、パスでボールを保持しながら、まず、相手のハーフバックのラインを攻略し、次にフルバックのラインを攻略することを基本的な方針とした。ロング・パス戦法では前線のフォワードに早くボールを供給していたサッカーが、ショート・パス戦法ではハーフバックのラインを突破するまで、確実にボールを保持することが主眼となった。また、味方のハーフバックもフォワードの後方10から20メートルのところにポジションを取り、攻撃をサポートするとともに、センター・ハーフバック（以下、センター・ハーフ）はフォワード陣に加わって得点を狙う戦い方を行うようになった。中盤では、ドリブルをする場合でも、前進を急がず、パスコースを作るための運ぶドリブルや、ボールのない選手はとにかく前線に飛び出していくというよりも、パスを受ける角度を作ったポジショニングをとることが重要視された¹³。

守備局面では、左右のハーフバックが相手ウイングとマッチアップ（対決）した。そして、センター・ハーフは常にボールを追い、味方のハーフバックやフルバックの前に追い込んでタックルすることやパスをインターセプトするという狙いをもった守備をした。また、インナーが中盤に下がって、スペースを埋めたり、フルバックの一人がハーフバックのラインに加わる戦い方がとられた¹⁴。

キック・アンド・ラッシュ戦法からロング・パス戦法の時代までは、各ポジションのタスクが明確であり、前線のラインと最終ラインの距離が遠いサッカーが展開されていたと考えることができる。しかし、ショート・パスを用いた戦い方の登場により、選手間の距離が近くなり、ボールに関わる選手が複数になった。このことにより、これまでボールの出し手と受け手の2人称の関係から、複数の選手が関わる3人称の攻撃が登場する。こういった攻撃に対して、これまでのような少数の守備者で広大なスペースを守ることが困難になる。そのため、攻撃のタスクが主だったフォワードの選手も守備に参加する必要が生じた。ショート・パスを用いた戦い方は、最前線と最終ラインの間にいるインナーやハーフバックの選手たちに攻守両面のプレーを求めるようになる。

4. 『How to Play Association Football』で紹介された技術と戦術

日本サッカー協会（以下、JFA）は、日本サッカー殿堂入りの掲額者のチャー・ディンに関する紹介文で「指導のテキストとして、How to Play Association Football を執筆。1923年8月、教え子らの協力により日本語版が出版される。当時のわが国にはない、写真や

¹² 全国高等学校体育連盟サッカー専門部編『高校サッカー100年』講談社、2019年、65-66頁。

¹³ 竹腰、前掲書、34-35頁。

¹⁴ 同上書、34頁。

図を多用した、技術や戦術に関する具体的且つ理論的なテキストであった¹⁵⁾とその著書の評価している。

チョー・ディンは『How to Play Association Football』の緒言で、他国に比べて日本ではサッカーが一般的ではないこと、サッカーに関する良書が少ないことを指摘し、自身の14年間の経験と日本で過ごした3年間で選手の欠点を見たことから、できるだけ日本でサッカーを行っている人たちが満足するような説明にしたと述べている¹⁶⁾。その内容は、サッカーを競技するための心得や各ポジションの説明、様々なボールを扱う技術、ポジショニングとグループ戦術、コーナーキック、スローイン、シューズについて、競技場などのことが書かれている。ここでは、『How to Play Association Football』に書かれている技術・戦術について整理する。なお、本稿の引用カギ括弧内のページ番号は全て、『How to Play Association Football』のページ番号である。

チョー・ディンは、サッカーを攻撃と守備の2つの局面に分類し、それぞれの原則を説明している。攻撃は、フォワードによる攻撃だけでなく、ハーフ、特にセンター・ハーフも加わる必要があることを指摘している。攻撃はセンター・フォワードを中心に行う。加えて、5人のフォワードが共通の意識を持つ必要があると述べている。また、日本では攻撃が第一で守備が第二という傾向があるが、「之は大いに誤られた考であつて守備と攻撃と何れが主何れが副と言ふ事は絶対にあるべき筈のものではない(14頁)」

とし、サッカーにおける守備の重要性を確認している¹⁷⁾。攻撃と守備の局面では、ゴールを奪うこととゴールを守ることの指摘がある。しかし、現在のようなフィールドを3つのエリアに区分し、各エリアでの攻撃や守備のプレーの原則¹⁸⁾に関する言及はない。

各ポジションの説明で、必要な身体的条件と攻撃・守備局面の役割及び必要な技術を一覧にした(表1)。各ポジションの役割の中で、グループ戦術に関する指摘がある。相手が左サイドから攻めてきた場合、レフト・フルバックがボールの方に進み(チャレンジ)、ライト・フルバックはレフト・フルバックの斜め後ろにポジションをとり(カバー)、二人のフルバックは決して一直線上に立つ

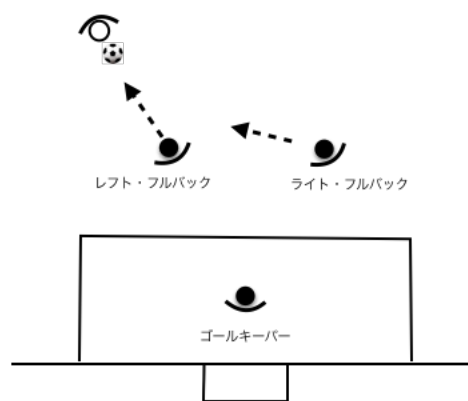


図1. フルバックによるチャレンジ&カバー

¹⁵⁾ 日本サッカー協会公式ホームページ 日本サッカー殿堂 掲額者 Kyaw DIN (https://www.jfa.jp/about_jfa/hall_of_fame/member/Kyaw_DIN.html) 閲覧日 2020年1月25日。

¹⁶⁾ チョー・ディン 平井武訳『How to Play Association Football』東京、1923年、緒言1頁。総論ではチョー・ディンのサッカーの経験は13年、日本滞在は2年となっている(チョー・ディン、8-9頁。)

¹⁷⁾ 同上書、14頁。

¹⁸⁾ 日本サッカー協会技術委員会監修『サッカー指導教本 2012 JFA 公認 C 級コーチ』日本サッカー協会、2012年、26頁。

てはならないとしている（図1）¹⁹。また、フルバックとハーフバックのカバーリングの連携により、守備組織を保つ方法の説明がある。

若し敵のウイングがボールをドリブルして来り、ハーフが其のボールをタックル仕損じたる場合は、フルバックは直ちにハーフに代りて其の敵にチャージし、ハーフは直ちに戻りて、其のフルバックの代りをなすべきなり。即ちウイングよりのパスにそなへ、又は其のフルがぬかれたる場合には、又其のウイングにチャージすべし（26-27頁）。

このように、定められたポジションに留まるのではなく、ゴールを守るという守備の目的を達成するために、状況に応じてポジションを変更する必要性を説いている。

表1.各ポジションに必要な身体的条件と攻撃・守備局面の役割及び必要な技術

ポジション名	身体的な条件	攻撃	守備
センター・フォワード	肉体的な強さ	攻撃の中心。インテリジェンスがあること。チームのどのポジションでもプレーできるような選手 左右どちらの足でも、ゴールから6メートル（20尺）の距離からのシュートを決めることができること 左右どちらの方向にも、ロング・パスができること ヘディングができること	記述なし
ライト及びレフト・インナー・フォワード	肉体的な条件はあまり重要でない 運動量が豊富であること	センター・フォワードの近くにポジションをとる 冷静な判断力で、シュートを狙う パスの正確性	センター・フォワードと併に敵の攻撃を制する 相手ボールのスローイン時は、相手のインナーをマークすること
ライト及びレフト・ウイングフォワード	走るのが速い選手	左足が得意な選手はレフト・ウイングに、右足が得意な選手はライト・ウイングに適している 役割はボールを自陣から相手陣地に運ぶこと 常にライン近くにポジションを敢り、フォワードと同列で前進する場合は、タッチライン側にボールを運び、フォワードよりも前にいる場合は、ペナルティエリアの角を指してドリブルをしかけること パスの取、ライト・ウイングはレフト・インナーを狙い、レフト・ウイングはライト・インナーを狙う角度のパスを出す	記述なし
センター・ハーフ	身長が高く、体重も重い選手	最も重要な役目と責任のあるポジション フォワードの攻撃時のサポート、ゲーム中、最も多くボールを触るポジション。判断力が冴えていること ゴールキックをヘディングで振り、フォワードにパスできること。 両足での正確なキック	敏捷性があり、相手の攻撃方法を察む力
ライト及びレフト・ハーフ	記述なし	味方のフォワードへボールを供給すること。攻撃の役目はあるもののその機会はほとんどなく、相手フォワードにボールが渡らないようにリスク管理すること 強いキックは不要だが、正確にボールを供給するキックが必要 マイボールのスローイン。コーナーキックは大抵ウイングがキックするが、筆者の考えではアウトサイドが扱うのが良い ドリブルをせず、出来るだけ早くパスを出す	相手フォワードの連携を妨害すること タイミングのいいタックル
フルバック	体力の強さ	ドリブルやボールを止めて動かないということをしてはならない	ハーフバックと同様の役目 「直ちにボールを追ひかけよ」がモットー タックルと強いキック 早い判断 フルバック二人のポジショニング（チャレンジ&カバーと横並びになってはいけない）
ゴールキーパー	身長のある事。走力が速いこと。視力がいいこと。 麻痺力があること	記述なし	相手がゴールエリアに密着している場合、ボールを取ったらすぐに投げること パンチング

チャー・デインの各ポジションの解説では、攻撃の局面ではセンター・フォワードとインナーがフィニッシュの役割、ウイングがサイドでボールを前進させる役割、これらフォワードのタスクをセンター・ハーフがサポートするとしている。左右のハーフやフルバックの攻撃への参加は、ボールを前線へ供給することであり、限定的である。守備の局面では、前線からのプレッシングを示す記述として、インナーがセンター・フォワードと併に相手の攻撃を制するとの記述がある。また、ボールのない場所でのタスクとして、マン・マークに関する記述がある。ボールを奪う方法として、左右のハーフ、フルバックのタックルの技術をあげている。ゴールキーパーに関して、「ゴールキーパー

¹⁹ チャー・デイン、前掲書、26頁。

の役目は他と全然異なるものなれば独立したるをコーチを必要とす（27頁）」とし、キーパーコーチの必要性を説いている。

表2. 目次の項目のテクニックごとの分類

ボールを運ぶ	「ドリブリング」
ボールを飛ばす	「キック」、「サイドキック（フロントパート）」、「サイドキック（バックパート） インステップキック」、「低きドロップ、キック」、「高きドロップ、キック」、「ヴォーリーキック」、「シューティング」、「シューティングに際しての注意」、「ヘディング」、「ヘディング（側面）」、「ヘディング（前方跳躍せずして）」
ボールを受ける	「ボールのストップ」 GK: 「ゴールキーパーの捕球」、「ゴールキーパーの（ボールをバーの上を越さしむる事）」 「膝の高さの強きボールの捕球」
ボールを奪う	「右側タックル」、「右側スプリット、タックリング（離れたる位置にて）」、「正面タックル法（第一法）」、「正面タックル法（第二法）」、「側面タックル法 第一法 左側タックル」、「スライディング法」

次に、チャー・ディンが解説する技術についてみる。目次の項目を JFA が示すボールを「運ぶ」、「飛ばす」、「受ける」、「奪う」テクニック²⁰で分類した（表2）。4種の技術について、それぞれ整理する。

ボールを運ぶ技術として、ドリブルの解説がある。「ドリブリングは總べてのフオワードが學ばねばならぬ事である（42頁）」とし、特にフオワードが習得すべき技術であるとしている。また、ボールに対して、「足先を以つてし、或は足の胛を以つてす。又足の外側を用ひ或は内側を用ふ（中略）左右兩足同様に其の方法を用ひ得るべき（42頁）」と兩足の様々な部分を用いる。ボールへの力の伝え方に関して、ボールを蹴るのではなく、押すこととしている²¹。ここでは、ボールを運ぶ技術について、ボールを前進させるためのドリブルなのか、相手ディフェンスラインを突破するためのドリブルなのかといったゲームのどの場面で用いるのかという戦術的意図について示されていない。

ボールを飛ばす技術として、トーキック（本文表記は、トーのキック：以下同様）、インステップキック（インステツプキック）、インフロントキック {サイドキック（フロントパート）}、インサイドキック {サイドキック（バックパート）}、アウトフロントキック（アウトサイドインステップキック）をあげている。これらのキックを兩足ともに使えることが重要であるが、特にインステップキック、インフロントキック、インサイドキック「に熟達すれば殆どプレーヤーとして我慢出来るもの（30頁）」と述べている²²。

トーキックに関する説明は省かれているが、残りのキックの説明について、用途とその解説、本文中では「練習」と書かれているキックの方法について整理した（表3）。キックの方法の説明では、軸足とボールの位置関係、軸足の膝の使い方、ボールへのインパクト、蹴り足のスイングのポイントなどが述べられている。また、本文では、インサイドキックとインステップキックの説明が「サイドキック（バックパート） インステップキック」とひとくくりになされていたり、「アウトサイドインステップキック」が「ア

²⁰ 日本サッカー協会技術委員会、前掲書、26頁。

²¹ チャー・ディン、43-44頁。

²² チャー・ディン、29-30頁。

ウトサイドキック」と省略されていたりする。用語が曖昧な部分について、その蹴り方の説明や本文中に掲載されている写真から推測し、現在、一般的に用いられているキックの名称で分類した。

表3. キックの種類とその用途及び蹴り方

キックの種類	用途・解説	練習(蹴り方)
インフロントキック 原文: サイドキック (フロントパート)	正確に高く飛ばす方法として、ボールキック、フリーキック、コーナーキック、ロングパスに用いるシュートの場合、高く弱く飛ばすので適していないディフェンスの際に必要なキック	三跗位のところからボールに蹴け(ママ)寄り左親指をボールから十時許りの所にボールに並行に置き左膝を屈し右足を大きくスイングしてモーションは太股より起こすインステップを真直に伸してボールの下半(原文は異体字)の部分ですくふ様に蹴るべし下を蹴れば蹴る程ボールは高く上る
インステップキック	「フキーンディングキック」とも呼ぶ。ハーフからフォワードにボールを供給する際、適している。日本ではこのキックの価値が理解されていないこのキックは弱いが正確である。フォワードにとって、自分たちがショートパスをし、横から来たバウンドするかグラウンダーのボールをブロックするために大切なキックであるボレー、ドロップキック、シュートは様々な方向、角度へもインステップが最もよい	ボール二跗の邊から離れて行き左の親指がボールの側に六時許り離れて地につき指先とボールとが並ぶ様に此の位置に來た時に左の膝を百二十度程屈げ右足に出来るだけ力を入れて指先を出るだけ下に向け関節をかたくしてボールに充分のキックを與ふべし、ボールは非常に速く二呎程の高さに飛ぶこのキックはボールの中心に向つてのキックなり然し左右何れかの側にありたるときは理論は同様なれども技巧に多少の差異を生ず即ち右足の運動が多少異なる、側面の場合程右足をまげなくてよき事となる。右側からキックする時は身体の重量を左側に托す左側からの時はこれと反對なる事に注意すべし(ママ)
インサイドキック 原文: サイドキック (バックパート)	様々な方向にボールを出せるこのキックによるボールの勢いは弱い、ボールのコーナーを狙うキックとしてよい。このキックは低いボールが出せる	右足にて蹴るには左足を六時程ボールより離して置き親指をボールと並行に置く。然る後右足をほど六時程ボールからはなして置く圓に示すが如し。右足の親指を中心として踵を以て強く内方に圓を置き足首の後部がボールを當る様に、左膝は前方に屈し右膝は側方に屈す方向を變へるには右足の親指がボールよりはなれる程ボールは右の方に行く
アウトフロントキック 原文: アウトサイド インステップキック	シュートで利用するのが、効果的サイドにパスを出すのにも適している	左足のポジションはフロントインステップキックと同様なり右足は蹴らんとする時は其の指先を真直に下をかけるよりもやゝもたげボールの左側を脚の外側にて蹴るモーションは膝の関節より起る足のスイングの方向は真直に進まずに右足の場合には足の外側より斜に前方に強く向ふ

浮き球を飛ばす技術として、「低きドロップ、キック」、「高きドロップ、キック」、「ヴォーリーキック」の項でインパクト時の姿勢やフォロースルーに関して解説している。

ヘディングについては、「日本に於てはヘディングはまだ極めて幼稚の域を脱せず大なる改良進歩を必要とす(51頁)」と述べ、写真を用いたヘディング技術の解説を行っている。また、「大概のプレーヤーは、ヘディングは餘り必要なりとは考へざれども、余の意見としては、ヘディングも巧ならざれば良きプレーヤーとする能はず(中略)競技中は何れの人とも知る如く、競技時間の半(原文は異体字)はボールは空にあるものなれば、此の點よりもヘディングに拙なるはプレーヤーの一大缺點なり(52頁)」と、日本において、ヘディングの技術が軽視されているが、ゲームでは重要な技術であることを指摘している。

シュートの技術として、ゴールエリアとペナルティエリアの中間からシュートするのが、ゴールまでの最良の距離と、シュートするエリアを指定している。ペナルティエリアの外側からのシュートはほとんどゴールすることができず、意味がない。また、ゴールの場所を感覚で把握し、シュートを打つ際はボールを蹴ることに集中すべきとしている²³。日本の状況について、「ライトウイング又はレフトウイングがボールをコーナー近くに持ち來りて、無効なるゴールシュートを試むるを見受け(39頁)」とし、ゴールへの角度のないエリアからシュートを試みているが、無効であることを図で示しつつ解説している。ウイングの選手がサイドに切り込んだ際は、シュートを狙うのではなく、

²³ チョー・ディン、38頁。

パスを、さらに、逆サイドのインナーを狙うことを推奨している。これは、逆サイドのインナーを狙うことで、同サイドのインナー、センター・フォワード、逆サイドのインナーと3人のフォワードが関わることのできるパスとなるからであると解説している²⁴。

ボールを受ける技術として、浮き球のコントロールはボールが地面についた時に足の裏を用いて止めること、正面や横からのボールを止める場合も同様に行う²⁵としている。フィールドの選手のボールを受ける技術の解説は以上である。ゴールキーパーのボールを受ける技術として、「ゴールキーパーの捕球」でキャッチング、「ゴールキーパーの(ボールをバーの上を越すしむる事)」でハイボールに対するディフレクティング、「膝の高さの強きボールの捕球」では、膝の高さに来るボールを蹴り返すのではなく、地面にひざまずいて身体で止める技術を紹介している²⁶。

ボールを奪う技術として、様々なタックルについて図を用いながら紹介している。「多くのプレーヤーは敵のフォワードが自分より八咫離れて居る處に於てドリブルして居るボールを直接タックルする事は不可能と考へ勝である(44頁)」とし、相手が様々な距離、角度にいる場合に応じたスタンディング及びスライディング・タックルについて解説している²⁷。『How to Play Association Football』では、ボールを奪う技術に関して、様々な方法を紹介しており、冊子全68ページのうち8ページを占める。また、別に3ページを用い、写真でタックルの技術を紹介している。本稿では、攻撃のショート・パス戦法に着目するため、タックルの技術に関する詳細な検討は今後の課題とする。

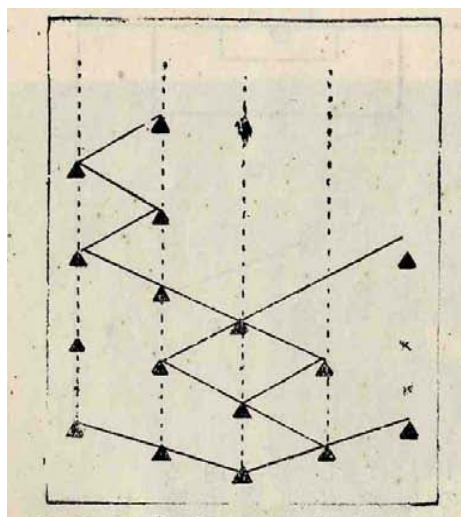


図2. フォワードのポジションニング (チャー・ディン、59頁)

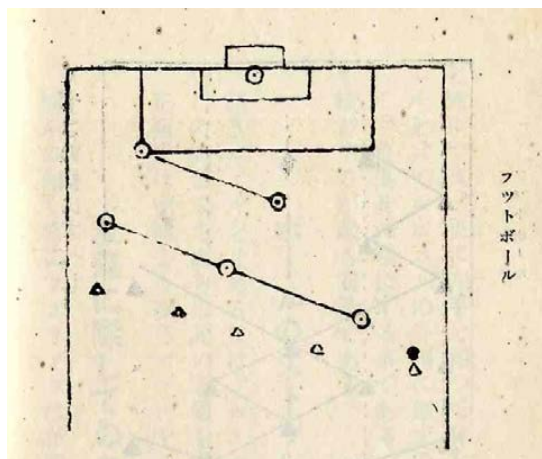


図3. ディフェンスラインの説明 (チャー・ディン、60頁)

²⁴ チャー・ディン、40頁。

²⁵ チャー・ディン、58頁。

²⁶ チャー・ディン、55-57頁。

²⁷ チャー・ディン、44-51頁。

グループ戦術に関して、攻撃時のフォワードのポジショニング、ウイングから中央へのパス、スルー・パス、ディフェンスラインに関する簡単な解説がある。攻撃時のフォワードのポジショニングに関する解説では、左右のフォワードは中央から 150 度程度の角度を作ってポジションをとること（図 2）、パスはジグザクに行うのが最も簡単で最も有効な攻撃方法であるとしている。また、パスはインサイドキックで、バウンドさせないグラウンダーのパスを用いるとしている。ウイングから中央へのパスは、ゴールラインに向かう角度で、サイドキックで行うのがよいとしている。スルー・パスに関する解説では、そもそも日本ではあまり使われていないと指摘し、フルバックを突破するグループ戦術として、ボール保持者がパスを二人のフルバックの間に通し、他のフォワードが走りこんでボールをコントロールし、シュートを狙う方法であると解説している。ディフェンスラインに関する解説では、図 3 のように、ハーフバックとフルバックが並行になるようラインを作る。また、そのポジション取りは、ゴールラインと 45 度の角度を保つのがよいとしている²⁸。

以上、チャー・ディンが著書で解説している技術・戦術を整理した。技術面では、ボールを運ぶ、飛ばす、受ける、奪う、それぞれの基礎的な技術について説明している。その中でも特に、飛ばすことと奪うことの解説が多い。これらの技術に関して、図や静止写真、連続写真を用いて詳細に解説している。グループ戦術では、攻撃の局面について、最終ライン攻略のためのフォワードのポジショニング、ウイングから中央へのパス、スルー・パス、守備の局面について、ディフェンスラインのポジショニングの簡単な解説がなされている。この著作では、基礎的な技術に関する説明が中心であり、ショート・パス戦法²⁹に関する解説としては、グループ戦術の中でショート・パスを用いた攻撃が紹介されている。しかし、チームがゲームをどのように進めるかの戦術として、ショート・パス戦法という言葉は使われていない。

5. チャー・ディンの指導とショート・パス戦法

1927（昭和 2）年極東大会の監督兼選手で 1936（昭和 11）年ベルリン・オリンピックで日本代表の監督を務めた鈴木重義は、早稲田高等学院でサッカー部を創部し、この時チャー・ディンの指導を受けている。この時のことを鈴木は次のように述べている。

「チャー・ディンは早稲田のサッカーは余り上手ではない、自分が見てあげようと言ったことから指導を受けることになった。（中略）指導したのは、戦術的にはスルー・パスとかトライアングル・パスであった。当時はこのようなショート・パス戦法は日本中どこも行っていなかったもので、相手は面白いようによく引っ掛かりました。そのほかには、スライディング・タックルなど始めて（ママ）経験するものでした。ヘディングも盛に教えました。正確にボールを蹴ることについては、例えばゴールポストを狙って正確に当たるといようなことを強調しました³⁰。」

²⁸ チャー・ディン、58-62 頁。

²⁹ 多和、前掲書、489 頁。

³⁰ 同上書、491 頁。

鈴木は後に「ア式蹴球實技³¹」を著しており、「キック (Kicking)」、「ボールのストップ (Stopping)」、「ドリブリング (Dribling)」、「タックリング (Tackling)」、「ヘディング (Heading)」、「チームの編成³²」「ゴールキーパー (Goalkeeper)」、「フル・バック (Full Back)」、「ハーフ・バック (Half Back)」、「フオワード (Forward)」の10項目に分けて、写真や挿絵、図を用いて、ボールを運ぶ、飛ばす、受ける、奪う、4つの技術を物理等を用いて説明し、ポジションの説明では必要な技術や能力が整理されている³³。これらは、『How to Play Association Football』でも紹介されており、鈴木によるサッカーの解説は、それまでに日本語で出版されたサッカー専門書と比較して際立っている。このようなサッカーの技術の分析は、チャー・ディンの影響を強く受けた可能性がある。また、早稲田での指導について、「ロングパス・システムだったが、ビルマ人チャーディンをコーチに頼んでから、いわゆるショートパスに切りかえた。これだと、多少の個人技のまずさも、ある程度の練習でカバーできた。当時、一般によく知られていなかったもので、相手はこの防ぎ方を知らず、この戦法でよく勝った。トライアングル・パスなどで、相手をキリキリ舞いさせて喜んでいた。初期のインターハイの連続優勝。第1回の東京カレッジ・リーグの優勝、日本フットボール大会優勝などは、まさにショートパスの威力を発揮したものだ³⁴」とチャー・ディンの指導した戦術が当時の日本サッカー界としては、特殊だったことを述べている。

全国巡回コーチで指導を受けた一人に、山口高校の学生で後に日本代表チーム監督、JFA 理事長となる竹腰重丸³⁵がいる。竹腰によると、チャー・ディンの指導は、サッカーの技術について、簡単な物理を適用し、「サッカーは考えることができるスポーツである」ことを示した。そして、これまでの「精神力と慣れ」のサッカーから、原因・結果を追求する科学性を加えた練習法が進歩し、種々の技術が飛躍的に向上していったと述べている³⁶。この指導に傾倒した竹腰は、東京まで出ていき、巡回コーチについていくようになる³⁷。

チャー・ディンの指導は正しい技術を示すデモンストレーションを用いていた。指導の要点は以下のとおりである³⁸。

- ①もっと強い球を蹴ること。ペナルティキックでも、フリーキックでもインステップで蹴ること。

³¹ 鈴木重儀「ア式蹴球實技」『アルス運動大講座』第2巻、アルス、1928年。

³² 「章」ではなく、「第一節 チームの編成」と書かれている。また、英語表記もない。

³³ 鈴木、前掲書、1928年。

³⁴ WMW50年史編集委員会『早稲田大学ア式蹴球部50年史』早稲田大学 WMW クラブ、1977年、198頁。

³⁵ 竹腰重丸は、明治39年大分県生まれ。大連一中から山口高校、東京大学で選手としてプレーし、第7回極東選手権に出場、1936年のベルリン・オリンピックには日本代表のコーチとして参加した。JFA 乗務理事やアジアサッカー連盟理事、国際サッカー連盟審判委員などを歴任している（竹腰、前掲書、2頁。）

³⁶ 竹腰、前掲書、33頁。

³⁷ 賀川浩『90歳の昔話ではない。』東邦出版、2014年、177頁。

³⁸ 日本蹴球協会、前掲書、70-71頁。

- ②正確に蹴るにはサイドキックが役に立つ。パスもシュートもサイドキックをもっと利用すること。
- ③ヘディングでシュートを決めること。ヘディングは正面へはじく場合と、首を振れば横にも斜めにも打ち出せるものだ、と型を示している。
- ④正確度がなければ役に立たない、正確度は練習の積み重ねで得られるものである、といてポストやバーに蹴りつける実演をたびたびやってみせた。
- ⑤ドッジング（註 当時はフェイントということばは使わなかった）は、主としてボールをドリブルで進めている間の上体の使い方で教えてくれた。
- ⑥1人で無理して相手を抜かないでも、味方に協力させパスを使えば、らくにショートパスで抜ける、といろいろの型を示してくれた。ボールを持たぬ仲間の位置のとり方の重要性を教えたのである。
- ⑦タックルは前面からでも、側面からでも、後方からでも、直接ボールに向かってタイミングよくやれば、肉体的な相手との接触なしでボールが奪い取れる、とまったく新しい面を開いてくれた。

このように、インステップキックやインサイドキック、ヘディングと、前面、側面、後方と様々な方向からのタックルのように、ボールを飛ばす技術と奪う技術が強調されていた。また、キックの正確性を高める必要性を述べ、さらにチョー・ディンが実演したことによって、指導を受けた側の基準となり、技術を高める動機となった可能性がある。個人戦術として、常に相手にドリブルでチャレンジするのではなく、味方とのショート・パスの交換による突破も選択肢としてあること、そのためのボールのない選手のポジショニングについての指導が行われた。

巡回コーチを受けた神戸一中は、ショート・パス戦法により、1924（大正13）年度第8回日本フットボール大会で優勝を果たす。チョー・ディンは様々な学校でのコーチを行っていたにも関わらず、なぜ、神戸一中がショート・パス戦法により強くなったのか。1923（大正12）年、彼は御影師範に一週間程度のコーチをするために、神戸に来ていた。その際に神戸一中の要請で、一日だけ（午前10時から午後4時くらいまで）の指導を行っている。そこでの指導は、インステップキック、サイドキック、ショート・パス、タックルといった基本的な技術だった。それまで、神戸一中の選手は、自分の蹴りたいようにボールを蹴っていたが、チョー・ディンは科学的に説明して、キックのスタイルを指導した。この指導を受けて、ショート・パスやスルー・パスの練習を行い、その後の試合で御影師範に勝利する³⁹。神戸一中と同じ時期、チョー・ディンの指導を受けていた御影師範はこの敗戦により、この戦い方では勝てないとし、以前のロング・キック主体の戦術をとるようになる⁴⁰。このように、神戸一中の場合、格上だった御影師範⁴¹に

³⁹ 神戸一中ア式蹴球部編『ボールを蹴って50年』神中サッカークラブ、1966年、83-84頁。

⁴⁰ 毎日新聞社『全国高校サッカー40年史』毎日新聞社、1962年、46-47頁。

⁴¹ 御影師範は神戸一中に敗れるまで、第1回から第7回までの日本フットボール大会で優勝する関西の強豪だった（毎日新聞社、前掲書。）

勝利した成功体験が、チョー・ディンの指導をベースとしたショート・パスを用いたサッカーを追求することを促したと考えられる。

神戸一中の用いたショート・パスの方法について、第8回日本フットボール大会で優勝した当時、部員だった北川貞義が『ボールを蹴って50年』のなかで説明している。神戸一中の用いたショート・パス戦法の概要について、フォワードは、球離れの早いショートパスを三角にボールを回す事で敵を釣り出し、相手のディフェンスラインの裏のスペースを目指した。

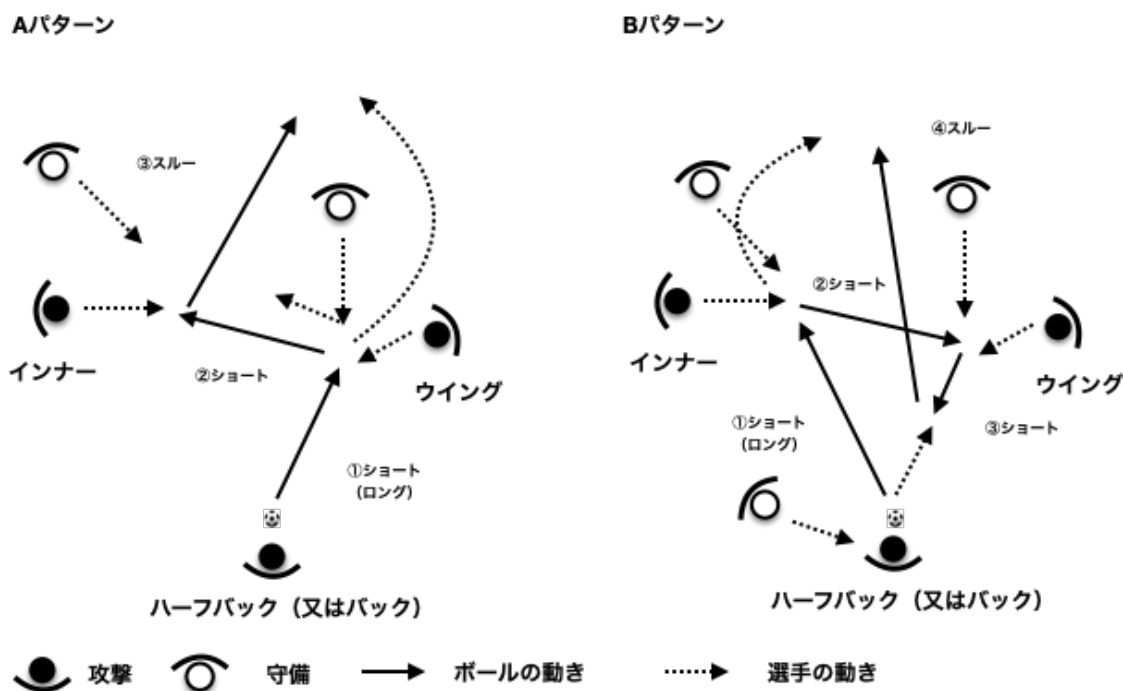


図4. 神戸一中のスルー・パス (神戸一中ア式蹴球部編『ボールを蹴って50年』、50頁参考。)

図4の「Aパターン」では、①ハーフバック又はフルバックからウイングへパスを出し、②ウイングとインナーとのパス交換によって突破することを説明している。特に、③インナーからウイングへのパスは、味方の足元ではなく、相手ディフェンスの裏のスペースへのスルー・パスを示している。現在では、壁パスやワンツー・パスと呼ばれるグループ戦術である。

「Bパターン」では、①ハーフバック又はフルバックからインナーへパスを出し、②インナーからウイングへのショート・パス、③このウイングに対してハーフバックの選手がサポートに入りパスを受け、③相手ディフェンスの裏のスペースに走り込むインナーへのスルー・パスを示している。現在では、味方がパス交換している間に動き出し、スペースでボールを受ける、3人目の動きと呼ばれるグループ戦術である。パスを出す際の注意点として、パスのスピードと角度、敵との距離の判断を正確にすること、味方のいる所ではなく、敵の届かない所、敵の間をスルーしてその背後へ出すこととしてい

る。受け手の注意点として、後方あるいは横で敵のポジションとモーションをよく見ている者がタイミングよく飛び出してパスを受けるとしている⁴²。

神戸一中のショート・パスとの出会いは、1919（大正8）年9月22日に、神戸に立ち寄った捕虜のチヨコスロバキア人と試合をしたことによる。神戸一中は、ウイングが敵陣にボールを運び、センタリングして押し込む、当時の日本のオーソドックスな戦い方をしてきた。これに対して、相手側はショート・パスを駆使し、神戸一中に8-0で勝利した⁴³。神戸一中のショート・パスのスタイルは、こういった外国のチームとの対戦や同じ街のライバル御影師範の存在、そして、チャー・ディンによる基礎技術の指導によって形作られたと考えることができる。特に御影師範は2学年上の年齢であり、相手と同じロング・パスを中心としたサッカーでは勝つことができない。打倒御影師範の戦術として、ショート・パスの精度を高めることやグループ戦術を追求することによって、神戸一中のショート・パスを中心とした戦い方の技術、戦術が成熟したと考えられる。

6. まとめにかえて

本稿では、日本サッカー草創期においてショート・パス戦法が誕生するきっかけとなったチャー・ディンの指導について、『How to Play Association Football』の整理と指導を受けた人物による評価から検討した。

『How to Play Association Football』では、ボールを運ぶ、飛ばす、受ける、奪う、それぞれの技術について、図や写真を用いた説明があった。特に、ボールを飛ばす技術と奪う技術に関しては、ボールと軸足の関係やタックルの入り方など非常に詳細な解説があった。ショート・パス戦法に関する説明は、フォワードのポジショニングやスルー・パスなどグループ戦術に関する指摘はあるものの、チャー・ディンが志向したサッカーがショート・パス戦法であるとする直接の言及はなかった。

チャー・ディンは、早稲田のほか、巡回コーチで日本各地のチームで指導を行っている。指導の方法は、サッカーの技術を理論的に説明し、デモンストレーションで実際に見せることだった。強調した内容は、自身の著作でも詳細に解説していたボールを飛ばす技術と奪う技術だった。個人戦術として、ボールを持ったらドリブルでチャレンジするだけでなく、ショート・パスの選択肢もあること、また、グループでどのように相手守備を突破するのかということも提示した。特に、相手ディフェンスラインの裏のスペースにボールを出すスルー・パスや3人目の動きによる突破は、当時の日本サッカーにおいて、革新的な戦術だった。この新たな戦術を採用した神戸一中が日本フットボール大会で優勝したことにより、ショート・パス戦法が一つのスタイルとして国内で認知されることとなる。ショート・パス戦法が現れたことにより、この戦い方を実践するための技術が必要となり、技術の幅が広がった。また、それに対抗するための新たな守備戦術も必要となり、日本サッカー界全体のレベルが向上したといえる。

⁴² 神戸一中ア式蹴球部編、前掲書、55頁。

⁴³ 同上書、32-33頁。